竜潭譚

泉鏡花

躑躅(つつじ)か丘(おか)

日は午(ご)なり。あらら木(ぎ)のたらたら坂に樹(き)の蔭もなし。寺の門(もん)、植木屋の庭、花屋の店など、坂下を挟(さしはさ)みて町の入口にはあたれど、のぼるに従ひて、ただ畑(はた)ばかりとなれり。番小屋めきたるもの小だかき処(ところ)に見ゆ。谷には菜(な)の花(はな)残りたり。路(みち)の右左、躑躅(つつじ)の花の紅(くれない)なるが、見渡す方(かた)、見返る方(かた)、いまを盛(さかり)なりき。ありくにつれて汗(あせ)少しいでぬ。

　空よく晴れて一点の雲もなく、風あたたかに野面(のづら)を吹けり。

一人にては行(ゆ)くことなかれと、優(やさ)しき姉上のいひたりしを、肯(き)かで、しのびて来つ。おもしろきながめかな。山の上の方(かた)より一束(ひとたば)の薪(たきぎ)をかつぎたる漢(おのこ)おり来(きた)れり。眉(まゆ)太く、眼(め)の細きが、向(むこう)ざまに顱巻(はちまき)したる、額(ひたい)のあたり汗になりて、のしのしと近づきつつ、細き道をかたよけてわれを通せしが、ふりかへり、

「危ないぞ危ないぞ。」

といひずてに眦(まなじり)に皺(しわ)を寄せてさつさつと行過(ゆきす)ぎぬ。

見返ればハヤたらたらさがりに、その肩(かた)躑躅(つつじ)の花にかくれて、髪結(かみゆ)ひたる天窓(あたま)のみ、やがて山蔭(やまかげ)に見えずなりぬ。草がくれの径(こみち)遠く、小川流るる谷間(たにあい)の畦道(あぜみち)を、

菅笠冠（すげがさかむ）りたる婦人（おんな）の、跣足（はだし）にて鋤（すき）をば肩にし、小さき女（むすめ）の児（こ）の手をひきて彼方（あなた）にゆく背姿（うしろすがた）ありしが、それも杉の樹立（こだち）に入りたり。

　行（ゆ）く方（かた）も躑躅なり。来（こ）し方（かた）も躑躅なり。山土（やまつち）のいろもあかく見えたる。あまりうつくしさに恐しくなりて、家路に帰らむと思ふ時、わがゐたる一株（ひとかぶ）の躑躅のなかより、羽音（はおと）たかく、虫のつと立ちて頰を掠（かす）めしが、かなたに飛びて、およそ五、六尺隔（へだ）てたる処（ところ）に礫（つぶて）のありたるそのわきにとどまりぬ。羽をふるふさまも見えたり。手をあげて走りかかれば、ぱつとまた立ちあがりて、おなじ距離五、六尺ばかりのところにとまりた

り。そのまま小石を拾ひあげて狙ひうちし、石はそれぬ。虫はくるりと一ツまはりて、また旧のやうにぞをる。追ひかくれば迅くもまた遁げぬ。遁ぐるが遠くには去らず、いつもおなじほどのあはひを置きてはキラキラとささやかなる羽ばたきして、鷹揚にその二すぢの細き髯を上下にわづくりておし動かすぞいと憎さげなりける。

われは足踏して心いらてり。そのゐたるあとを踏みにじりて、

「畜生、畜生。」

と呟きざま、躍りかかりてハタと打ちし、拳はい

たづらに土によごれぬ。

渠(かれ)は一足(ひとあし)先なる方(かた)に悠々(ゆうゆう)と羽(は)づくろひす。憎しと思ふ心を籠(こ)めて瞻(みまも)りたれば、虫は動かずなりたり。つくづく見れば羽蟻(はあり)の形して、それよりもやや大(おおい)なる、身はただ五彩(ごさい)の色を帯びて青みがちにかがやきたる、うつくしさいはむ方(かた)なし。

色彩あり光沢(こうたく)ある虫は毒なりと、姉上の教へたるをふと思ひ出(い)でたれば、打置(うちお)きてすごすごと引返(ひつかえ)せしが、足許(あしもと)にさきの石の二(ふた)ツに砕(くだ)けて落ちたるより俄(にわか)に心動き、拾ひあげて取つて返し、きと毒虫をねらひたり。

このたびはあやまたず、したたかうつて殺しぬ。嬉(うれ)

しく走りつきて石をあはせ、ひたと打ひしぎて蹴飛ばしたる、石は躑躅のなかをくぐりて小砂利をさそひ、ばらばらと谷深くおちゆく音しき。

袂のちり打はらひて空を仰げば、日脚やや斜になりぬ。ほかほかとかほあつき日向に唇かわきて、眼のふちより頬のあたりむず痒きこと限りなかりき。

心着けば旧来し方にはあらじと思ふ坂道の異なる方にわれはいつかおりかけゐたり。丘ひとつ越えたりけむ、戻る路はまたさきとおなじのぼりになりぬ。見渡せば、見まはせば、赤土の道幅せまく、うねりうねり果しなきに、両側つづきの躑躅の花、遠き方は前後を

塞ぎて、日かげあかく咲込めたる空のいろの真蒼き下に、彳むはわれのみなり。

鎮守の社

坂は急ならず長くもあらねど、一つ尽ればまたあらたに顕る。起伏あたかも大波の如く打続きて、いつ坦ならむとも見えざりき。

あまり倦みたれば、一ツおりてのぼる坂の窪に踞ひし、手のあきたるまま何ならむ指もて土にかきはじめぬ。さといふ字も出来たり。くといふ字も書きたり。

曲りたるもの、直(すぐ)なるもの、心の趣くままに落書(らくがき)したり。しかなせるあひだにも、頬のあたり先刻(さき)に毒虫の触れたらむと覚ゆるが、しきりにかゆければ、袖(そで)もてひまなく擦(こす)りぬ。擦りてはまたもの書きなどせる、なかにむつかしき字のひとつ形よく出来たるを、姉に見せばやと思ふに、俄(にわか)にその顔の見たうぞなりたる。

立(たち)あがりてゆくてを見れば、左右より小枝を組みてあはひも透(す)かで躑躅(つつじ)咲きたり。日影ひとしほ赤(あこ)うなりまさりたるに、手を見たれば掌(たなそこ)に照りそひぬ。

一文字にかけのぼりて、唯(と)見ればおなじ躑躅のだらだらおりなり。走りおりて走りのぼりつ。いつまでか

かくてあらむ、こたびこそと思ふに違(たが)ひて、道はまた蜿(うね)れる坂なり。踏心地(ふみごこち)柔(やわら)かく小石ひとつあらずなりぬ。

いまだ家には遠しとみゆるに、忍びがたくも姉の顔なつかしく、しばらくも得堪(えた)へずなりたり。

再びかけのぼり、またかけりおりたる時、われしらず泣きてゐつ。泣きながらひたばしりに走りたれど、なほ家ある処(ところ)に至らず、坂も躑躅も少しもさきに異らずして、日の傾くぞ心細き。肩、背のあたり寒うなりぬ。ゆふ日あざやかにぱつと茜(あかね)さして、眼もあやに躑躅の花、ただ紅(くれない)の雪の降積(ふりつ)めるかと疑はる。

われは涙の声たかく、あるほど声を絞りて姉をもとめぬ。一たび二たび三たびして、こたへやすると耳を澄せば、遥に滝の音聞えたり。どうどうと響くなかに、いと高く冴えたる声の幽に、

「もういいよ、もういいよ。」

と呼びたる聞えき。こはいとけなき我がなかまの隠れ遊びといふものするあひ図なることを認め得たる、一声くりかへすと、ハヤきこえずなりしが、やうやう心たしかにその声したる方にたどりて、また坂ひとつおりて一つのぼり、こだかき所に立ちて瞰おろせば、あまり雑作なしや、堂の瓦屋根、杉の樹立のなかより

見えぬ。かくてわれ踏迷（ふみまよ）ひたる紅（くれない）の雪のなかをばのがれつ。背後（うしろ）には躑躅（つつじ）の花飛び飛びに咲きて、青き草まばらに、やがて堂のうらに達せし時は一株（ひとかぶ）も花のあかきはなくて、たそがれの色、境内（けいだい）の手洗水（みたらし）のあたりを籠（こ）めたり。柵結（さくゆ）ひたる井戸ひとつ、銀杏（いちょう）の古（ふ）りたる樹あり、そがうしろに人の家の土塀（どべい）あり。こなたは裏木戸のあき地にて、むかひに小さき稲荷（いなり）の堂あり。石の鳥居（とりい）あり。木の鳥居あり。この木の鳥居の左の柱には割れめありて太き鉄の輪を嵌（は）めたるさへ、心たしかに覚えある、ここよりはハヤ家に近しと思ふに、さきの恐しさは全く忘れ果てつ。ただひとへにゆふ日照り

そひたるつつじの花の、わが丈よりも高き処、前後左右を咲埋めたるあかき色のあかきがなかに、緑と、紅と、紫と、青白の光を羽色に帯びたる毒虫のキラキラと飛びたるさまの広き景色のみぞ、画の如く小さき胸にゑがかれける。

かくれあそび

さきにわれ泣きいだして救を姉にもとめしを、渠に認められしぞ幸なる。いふことを肯かで一人いで来しを、弱りて泣きたりと知られむには、さもこそと

て笑はれなむ。優しき人のなつかしけれど、顔をあはせていひまけむは口惜しきに。

嬉しく喜ばしき思ひ胸にみちては、また急に家に帰らむとはおもはず。ひとり境内に彳みしに、わツといふ声、笑ふ声、木の蔭、井戸の裏、堂の奥、廻廊の下よりして、五ツより八ツまでなる児の五、六人前後に走り出でたり、こはかくれ遊びの一人が見いだされたるものぞとよ。二人三人走り来て、わが其処に立てるを見つ。皆瞳を集めしが、

「お遊びな、一所にお遊びな。」とせまりて勧めぬ。小家あちこち、このあたりに住むは、かたゐといふも

のなりとぞ。風俗少しく異なれり。児(こ)どもが親たちの家富(と)みたるも好(よ)き衣着(きぬ)たるはあらず、大抵(たいてい)跣足(はだし)なり。三味線(さみせん)弾(ひ)きて折々(おりおり)わが門(かど)に来(きた)るもの、溝川(みぞかわ)に鰌(どじょう)を捕ふるもの、附木(つけぎ)、草履(ぞうり)など鬻(ひさ)ぎに来るものだちは、皆この児(こ)どもが母なり、父なり、祖母などなり。さるものとはともに遊ぶな、とわが友は常に戒(いまし)めつ。さるに町方(まちかた)の者としいへば、かたゐなる児(こ)ども尊(とうと)び敬ひて、頃刻(しばらく)もともに遊ばんことを希(こいねが)ふや、親しく、優しく勉めてすなれど、不断はこなたより遠ざかりしが、その時は先にあまり淋(さび)しくて、友欲(ほ)しき念の堪(た)へがたかりしその心のまだ失せざると、恐しかりしあとの楽し

きとに、われは拒まずして頷きぬ。

児どもはさざめき喜びたりき。さてまたかくれあそびを繰返すとて、拳してさがすものを定めしに、われその任にあたりたり。面を蔽へといふままにしつ。ひツそとなりて、堂の裏崖をさかさに落つる滝の音どうどうと松杉の梢ゆふ風に鳴り渡る。かすかに、

「もう可いよ、もう可いよ。」

と呼ぶ声、谺に響けり。眼をあくればあたり静まり返りて、たそがれの色また一際襲ひ来れり。大なる樹のすくすくとならべるが朦朧としてうすぐらきなかに隠れむとす。

声したる方をと思ふ処には誰もをらず。ここかしこさがしたれど人らしきものあらざりき。

また旧の境内の中央に立ちて、もの淋しく瞶しぬ。山の奥にも響くべく凄じき音して堂の扉を鎖す音しつ、闃としてものも聞えずなりぬ。

親しき友にはあらず。常にうとましき児どもなれば、かかる機会を得てわれをば苦めむとや企みけむ。身を隠したるまま密に遁げ去りたらむには、探せばとて獲らるべき。益もなきことをとふと思ひうかぶに、うちすてて踵をかへしつ。さるにても万一わがみいだすを待ちてあらばいつまでも出でくることを得ざるべ

し、それもまたはかりがたしと、心迷（こころまよ）ひて、とつ、おいつ、徒（いたずら）に立ちて困（こう）ずる折しも、何処（いずく）より来（きた）りしとも見えず、暗うなりたる境内の、うつくしく掃（は）いたる土のひろびろと灰色なせるに際立（きわだ）ちて、顔の色白く、うつくしき人、いつかわが傍（かたわら）にゐて、うつむきざまにわれをば見き。

極めて丈高（たけたか）き女なりし、その手を懐（ふところ）にして肩を垂れたり。優（やさ）しきこゑにて、

「こちらへおいで。こちら。」

といひて前（さき）に立ちて導きたり。見知りたる女（ひと）にあらねど、うつくしき顔の笑（えみ）をば含みたる、よき人と思ひ

たれば、怪しまで、隠れたる児のありかを教ふるとさとりたれば、いそいそと従ひぬ。

あふ魔が時

わが思ふ処に違はず、堂の前を左にめぐりて少しゆきたる突あたりに小さき稲荷の社あり。青き旗、白き旗、二、三本その前に立ちて、うしろはただちに山の裾なる雑樹斜めに生ひて、社の上を蔽ひたる、その下のをぐらき処、孔の如き空地なるをソとめくばせしき。瞳は水のしたたるばかり斜にわが顔を見て

動けるほどに、あきらかにその心ぞ読まれたる。

さればいささかもためらはで、つかつかと社の裏をのぞき込む、鼻うつばかり冷たき風あり。落葉、朽葉堆く水くさき土のにほひしたるのみ、人の気勢もせで、頸もとの冷かなるに、と胸をつきて見返りたる、またたくまと思ふ彼の女はハヤ見えざりき。何方にか去りけむ、暗くなりたり。

身の毛よだちて、思はず啊呀と叫びぬ。

人顔のさだかならぬ時、暗き隅に行くべからず、たそがれの片隅には、怪しきものゐて人を惑はすと、姉上の教へしことあり。

われは茫然（ぼうぜん）として眼（まなこ）を瞬（みは）りぬ。足ふるひたれば動きもならず、固くなりて立ちすくみたる、左手（ゆんで）に坂あり。穴の如く、その底よりは風の吹き出（い）づると思ふ黒（こく）闇々（あんあん）たる坂下より、もののぼるやうなれば、ここにあらば捕へられむと恐しく、とかうの思慮もなさで社（やしろ）の裏の狭きなかににげ入りつ。眼を塞（ふさ）ぎ、呼吸（いき）をころしてひそみたるに、四足（よつあし）のものの歩むけはひして、社の前を横ぎりたり。

　われは人心地（ひとごこち）もあらで見られじとのみひたすら手足を縮めつ。さるにてもさきの女（ひと）のうつくしかりし顔、優（やさし）かりし眼を忘れず。ここをわれに教へしを、今に

して思へばかくれたる児（こ）どものありかにあらで、何らか恐しきもののわれを捕へむとするを、ここに潜（ひそ）め、助かるべしとて、導きしにはあらずやなど、はかなきことを考へぬ。しばらくして小提灯（こぢようちん）の火影（ほかげ）あかきが坂下より急ぎのぼりて彼方（かなた）に走るを見つ。ほどなく引返（ひつかえ）してわがひそみたる社（やしろ）の前に近づきし時は、一人ならず二人三人（ふたりみたり）連立（つれだ）ちて来（きた）りし感あり。

あたかもその立留（たちどま）りし折から、別なる跫音（あしおと）、また坂をのぼりてさきのものと落合（おちあ）ひたり。

「おいおい分らないか。」

「ふしぎだな、なんでもこの辺で見たといふものがあ

るんだが。」
とあとよりいひたるはわが家につかひたる下男の声に似たるに、あはや出でむとせしが、恐しきものの然はたばかりて、おびき出すにやあらむと恐しさは一しほ増しぬ。
「もう一度念のためだ、田圃の方でも廻つて見よう、お前も頼む。」
「それでは。」といひて上下にばらばらと分れて行く。
再び寂としたれば、ソと身うごきして、足をのべ、板めに手をかけて眼ばかりと思ふ顔少し差出だして、外の方をうかがふに、何ごともあらざりければ、やや

落着(おちつ)きたり。怪(あや)しきものども、何とてやはわれをみいだし得む、愚(おろか)なる、と冷(ひやや)かに笑ひしに、思ひがけず、誰(たれ)ならむたまぎる声して、あわてふためき遁(に)ぐるがありき。　驚きてまたひそみぬ。

「ちさとや、ちさとや。」と坂下あたり、かなしげにわれを呼ぶは、姉上の声なりき。

大沼(おおぬま)

「ゐないツて私(わたし)あどうしよう、爺(じい)や。」

「根ツからゐさつしやらぬことはござりますまいが、

日は暮れまする。何せい、御心配なこんでござります。お前様(まえさま)遊びに出します時、帯の結(むすび)めを丁(とん)とたたいてやらつしやれば好(よ)いに。」

「ああ、いつもはさうして出してやるのだけれど、けふはお前私にかくれてそツと出て行つたろうではないかねえ。」

「それはハヤ不念(ぶねん)なこんだ。帯の結(むすび)めさへ叩(たた)いときや、何がそれで姉様なり、母様(おふくろさま)なりの魂(たましい)が入るもんだで魔(エテ)めはどうすることもしえないでごす。」

「さうねえ。」とものかなしげに語らひつつ、社(やしろ)の前をよこぎりたまへり。

走りいでしが、あまりおそかりき。いかなればわれ姉上をまで怪(あやし)みたる。悔(く)ゆれど及ばず、かなたなる境内(けいだい)の鳥居のあたりまで追ひかけたれど、早やその姿は見えざりき。涙ぐみて彳(たたず)む時、ふと見る銀杏(いちょう)の木のくらき夜の空に、大(おおい)なる円(まる)き影して茂れる下に、女の後姿(うしろすがた)ありてわが眼(まなこ)を遮(さえぎ)りたり。

あまりよく似たれば、姉上と呼ばむとせしが、よしなきものに声かけて、なまじひにわが此処(ここ)にあるを知られむは、拙(つたな)きわざなればと思ひてやみぬ。

とばかりありて、その姿またかくれ去りつ。見えず

なればなほなつかしく、たとへ恐しきものなればとて、かりにもわが優しき姉上の姿に化したる上は、われを捕へてむごからむや。さきなるはさもなくて、いま幻に見えたるがまことその人なりけむもわかざるを、何とて言はかけざりしと、打泣きしが、かひもあらず。

あはれさまざまのものの怪しきは、すべてわが眼のいかにかせし作用なるべし、さらずば涙にくもりしや、術こそありけれ、かなたなる御手洗にて清めてみばやと寄りぬ。

煤けたる行燈の横長きが一つ上にかかりて、ほとゝぎすの画と句など書いたり。灯をともしたるに、水は

よく澄みて、青き苔むしたる石鉢の底もあきらかなり。手に掬ばむとしてうつむく時、思ひかけず見たるわが顔はそもそもいかなるものぞ。覚えず叫びしが心を籠めて、気を鎮めて、両の眼を拭ひ拭ひ、水に臨む。

　われにもあらでまたとは見るに忍びぬを、いかでわれかかるべき、必ず心の迷へるならむ、今こそ、今こそとわななきながら見直したる、肩をとらへて声ふるはし、

「お、お、千里。ええも、お前は。」と姉上ののたまふに、縋りつかまくみかへりたる、わが顔を見たまひしが、

「あれ！」
といひて一足すさりて、
「違つてたよ、坊や。」とのみいひずてに衝と馳せ去りたまへり。
怪しき神のさまざまのことしてなぶるわと、あまりのことに腹立たしく、あしずりして泣きに泣きつつ、ひたばしりに追いかけぬ。捕へて何をかなさむとせし、そはわれ知らず。ひたすらものの口惜しければ、とにかくもならばとてなむ。
坂もおりたり、のぼりたり、大路と覚しき町にも出でたり、暗き径も辿りたり、野もよこぎりぬ。畦も越

えぬ。あとをも見ずて駈けたりし。

道いかばかりなりけむ、漫々たる水面やみのなかに銀河の如く横（よこた）はりて、黒き、恐しき森四方をかこめる、大沼（おおぬま）とも覚しきが、前途（ゆくて）を塞（ふさ）ぐと覚ゆる蘆（あし）の葉の繁きがなかにわが身体（からだ）倒れたる、あとは知らず。

五位鷺（ごいさぎ）

眼のふち清々（すがすが）しく、涼しき薫（かおり）つよく薫ると心着（こころづ）く、身は柔（やわら）かき蒲団（ふとん）の上に臥したり。やや枕をもたげて見る、竹縁（ちくえん）の障子（しょうじ）あけ放（はな）して、庭つづきに向ひなる

山懐（やまふところ）に、緑の草の、ぬれ色青く生茂（おいしげ）りつ。その半腹（はんぷく）にかかりある巌角（いわかど）の苔（こけ）のなめらかなるに、一挺（いっちょう）はだか蠟（ろう）に灯（ひ）ともしたる灯影（ほかげ）すずしく、筧（かけい）の水むくむくと湧（わ）きて玉（たま）ちるあたりに盥（たらい）を据ゑて、うつくしく髪（かみ）結（ゆ）うたる女（ひと）の、身に一糸もかけで、むかうざまにひたりてゐたり。

筧（かけい）の水はそのたらひに落ちて、溢（あふ）れにあふれて、地の窪（くぼ）みに流るる音しつ。

蠟（ろう）の灯（ひ）は吹くとなき山おろしにあかくなり、くらうなりて、ちらちらと眼に映ずる雪なす膚（はだえ）白かりき。

わが寝返（ねがえ）る音に、ふとこなたを見返り、それと頷（うなず）く

状(さま)にて、片手をふちにかけつつ片足を立てて盥(たらい)のそとにいだせる時、颯(さ)と音して、烏(からす)よりは小さき鳥の真白(ましろ)きがひらひらと舞ひおりて、うつくしき人の脛(はぎ)のあたりをかすめつ。そのままおそれげもなう翼を休めたるに、ざぶりと水をあびせざま莞爾(につこ)とあでやかに笑うてたちぬ。手早く衣(きぬ)もてその胸をば蔽(おお)へり。鳥はおどろきてははたはたと飛去(とびさ)りぬ。

　夜の色は極めてくらし、蠟(ろう)を取りたるうつくしき人の姿さやかに、庭下駄(にわげた)重く引く音しつ。ゆるやかに縁(えん)の端に腰をおろすとともに、手をつきそらして捩向(ねじむ)きざま、わがかほをば見つ。

「気分は癒つたかい、坊や。」

といひて頭を傾けぬ。ちかまさりせる面けだかく、眉あざやかに、瞳すずしく、鼻やや高く、唇の紅なる、額つき頬のあたり臈たけたり。こは予てわがよしと思ひ詰たる雛のおもかげによく似たれば貴き人ぞと見き。年は姉上よりたけたまへり。知人にはあらざれど、はじめて逢ひし方とは思はず、さりや、誰にかあるらむとつくづくみまもりぬ。

またほほゑみたまひて、

「お前あれは斑猫といつて大変な毒虫なの。もう可いね、まるでかはつたやうにうつくしくなつた、あれ

では姉様（ねえさん）が見違へるのも無理はないのだもの。」

　われもさあらむと思はざりしにもあらざりき。いまはたしかにそれよと疑はずなりて、のたまふままに頷（うなず）きつ。あたりのめづらしければ起きむとする夜着（よぎ）の肩、ながく柔（やわら）かにおさへたまへり。

「ぢっとしておいで、あんばいがわるいのだから、落着（おちつ）いて、ね、気をしづめるのだよ、可（い）いかい。」

　われはさからはで、ただ眼（め）をもて答へぬ。

「どれ。」といひて立つたる折、のしのしと道芝（みちしば）を踏む音して、つづれをまとうたる老夫（おやじ）の、顔の色いと赤きが縁近（えんちこ）う入（はい）り来つ。

「はい、これはお児さまがござらつせえたの、可愛いお児じや、お前様も嬉しかろ。ははは、どりや、またいつものを頂きましよか。」

腰をななめにうつむきて、ひつたりとかの筧に顔をあて、口をおしつけてごつごつごつとたてつづけにのみたるが、ふツといきを吹きて空を仰ぎぬ。

「やれやれ甘いことかな。はい、参ります。」

と踵を返すを、こなたより呼びたまひぬ。

「ぢいや、御苦労だが。また来ておくれ、この児を返さねばならぬから。」

「あいあい。」

と答へて去る。山風颯とおろして、彼の白き鳥また翔ちおりつ。黒き盥のふちに乗りて羽づくろひして静まりぬ。

「もう、風邪を引かないやうに寝させてあげよう、どれそんなら私も。」とて静に雨戸をひきたまひき。

九ツ谺

やがて添臥したまひし、さきに水を浴びたまひし故にや、わが膚をりをり慄然たりしが何の心もなうひしと取縋りまゐらせぬ。あとをあとをといふに、をさな

物語二(ふた)ツ三(み)ツ聞かせ給(たま)ひつ。やがて、

「一(ひと)ツ谺(こだま)、坊や、二(ふた)ツ谺(こだま)といへるかい。」

「二ツ谺。」

「三(み)ツ谺(こだま)、四(よ)ツ谺(こだま)といつて御覧。」

「四ツ谺。」

「五(いつ)ツ谺(こだま)。そのあとは。」

「六(む)ツ谺(こだま)。」

「さうさう七(なな)ツ谺(こだま)。」

「八(や)ツ谺(こだま)。」

「九(ここの)ツ谺(こだま)――ここはね、九(ここの)ツ谺(こだま)といふ処(ところ)なの。

さあもうおとなにして寝るんです。」

背に手をかけ引寄せて、玉の如きその乳房をふくませたまひぬ。露に白き襟、肩のあたり鬢のおくれ毛はらはらとぞみだれたる、かかるさまは、わが姉上とは太く違へり。乳をのまむといふを姉上は許したまはず。

ふところをかいさぐれば常に叱りたまふなり。母上みまかりたまひてよりこのかた三年を経つ。乳の味は忘れざりしかど、いまふくめられたるはそれには似ざりき。垂玉の乳房ただ淡雪の如く含むと舌にきえて触るるものなく、すずしき唾のみぞあふれいでたる。

軽く背をさすられて、われ現になる時、屋の棟、天

井の上と覚し、凄まじき音してしばらくは鳴りも止まず。ここにつむじ風吹くと柱動く恐しさに、わななき取つくを抱きしめつつ、

「あれ、お客があるんだから、もう今夜は堪忍しておくれよ、いけません。」

とキとのたまへば、やがてぞ静まりける。

「恐くはないよ。鼠だもの。」

とある、さりげなきも、われはなほその響のうちにものの叫びたる声せしが耳に残りてふるへたり。

うつくしき人はなかばのりいでたまひて、とある蒔絵ものの手箱のなかより、一口の守刀を取出しつ

つ鞘(さや)ながら引(ひき)そばめ、雄々(おお)しき声にて、
「何が来てももう恐くはない。安心してお寝よ。」と
のたまふ、たのもしき状(さま)よと思ひてひたとその胸にわ
が顔をつけたるが、ふと眼をさましぬ。残燈(ありあけ)暗く
床柱(とこばしら)の黒うつややかにひかるあたり薄き紫の色籠(いろこ)め
て、香(こう)の薫(かおり)残りたり。枕をはづして顔をあげつ。顔
に顔をもたせてゆるく閉(とじ)たまひたる眼(め)の睫毛(まつげ)かぞふる
ばかり、すやすやと寝入りてゐたまひぬ。ものいはむ
とおもふ心おくれて、しばし瞻(みまも)りしが、淋(さび)しさにたへ
ねばひそかにその唇に指さきをふれて見ぬ。指はそれ
て唇には届かでなむ、あまりよくねむりたまへり。鼻

をやつままむ眼をやおさむとまたつくづくと打（うち）まもりぬ。ふとその鼻頭（はなさき）をねらひて手をふれしに空（くう）を捻（ひね）りて、うつくしき人は雛（ひな）の如く顔の筋（すじ）ひとつゆるみもせざりき。またその眼のふちをおしたれど水晶のなかなるものの形を取らむとするやう、わが顔はそのおくれげのはしに頰をなでらるるまで近々（ちかぢか）とありながら、いかにしても指さきはその顔に届かざるに、はては心いれて、乳（ち）の下に面（おもて）をふせて、強く額（ひたい）もて圧（お）したるに、顔にはただあたたかき霞（かすみ）のまとふとばかり、のどかにふはふはとさはりしが、薄葉（うすよう）一重（ひとえ）の支（ささ）ふるなく着けたる額（ひたい）はつと下に落ち沈むを、心着（こころづ）けば、うつくしき人の

胸は、もとの如く傍（かたわら）にあをむきゐて、わが鼻は、いたづらにおのが膚（はだ）にぬくまりたる、柔（やわらか）き蒲団（ふとん）に埋（うも）れて、をかし。

渡船（わたしぶね）

夢幻（ゆめまぼろし）ともわかぬに、心をしづめ、眼をさだめて見たる、片手はわれに枕させたまひし元のまま柔（やわら）かに力なげに蒲団（ふとん）のうへに垂れたまへり。

片手をば胸にあてて、いと白くたをやかなる五指（ごし）をひらきて黄金（おうごん）の目貫（めぬき）キラキラとうつくしき鞘（さや）の塗（ぬり）の輝

きたる小さき守刀（まもりがたな）をしかと持つともなく乳（ち）のあたりに落して据（す）ゑたる、鼻たかき顔のあをむきたる、唇のものいふ如き、閉ぢたる眼（め）のほほ笑む如き、髪のさらさらしたる、枕にみだれかかりたる、それも違（たが）はぬに、胸に剣（つるぎ）をさへのせたまひたれば、亡（な）き母上のその時のさまに紛（まが）ふべくも見えずなむ、コハこの君（きみ）もみまかりしよとおもふいまはしさに、はや取除（とりの）けなむと、胸なるその守刀（まもりがたな）に手をかけて、つと引く、せつぱゆるみて、青き光眼（まなこ）を射（い）たるほどこそあれ、いかなるはずみにか血汐（ちしお）さとほとばしりぬ。眼もくれたり。したしたとながれにじむをあなやと両の拳（こぶし）もてしかとおさ

へたれど、留まらで、たふたふと音するばかりぞ淋漓としてながれつたへる、血汐のくれなゐ衣をそめつ。うつくしき人は寂として石像の如く静なる鳩尾のしたよりしてやがて半身をひたし尽しぬ。おさへたるわが手には血の色つかぬに、燈にすかす指のなかの紅なるは、人の血の染みたる色にはあらず、訝しく撫で試むる掌のその血汐にはぬれもこそせね、こころづきて見定むれば、かいやりし夜のものあらはになりて、すずしの絹をすきて見ゆるその膚にまとひたまひし紅の色なりける。いまはわれにもあらで声高に、母上、母上と呼びたれど、叫びたれど、ゆり動か

し、おしうごかししたりしが、効なくてなむ、ひた泣きに泣く泣くいつのまにか寝たりと覚し。顔あたたかに胸をおさるる心地に眼覚めぬ。空青く晴れて日影まばゆく、木も草もてらてらと暑きほどなり。

われはハヤゆうべ見し顔のあかき老夫の背に負はれて、とある山路を行くなりけり。うしろよりは彼のうつくしき人したがひ来ましぬ。

さてはあつらへたまひし如く家に送りたまふならむと推はかるのみ、わが胸の中はすべて見すかすばかり知りたまふやうなれば、わかれの惜しきも、ことのいぶかしきも、取出でていはむは益なし。教ふべきこと

ならむには、彼方（かなた）より先んじてうちいでこそしたまふべけれ。

家に帰るべきわが運（うん）ならば、強ひて止（とど）まらむと乞（こ）ひたりとて何かせん、さるべきいはれあればこそ、と大人（おとな）しう、ものもいはでぞ行（ゆ）く。

断崖の左右に聳（そび）えて、点滴声（てんてきこえ）する処（ところ）ありき。雑草（ざっそう）高き径（こみち）ありき。松柏（まつかしわ）のなかを行（ゆ）く処（ところ）もありき。きき知らぬ鳥うたへり。褐色なる獣（けもの）ありて、をりをり叢（くさむら）に躍（おど）り入りたり。ふみわくる道とにもあらざりしかど、去年（こぞ）の落葉（おちば）道を埋（うず）みて、人多く通（かよ）ふ所としも見えざりき。

をぢは一挺の斧を腰にしたり。れいによりてのしのしとあゆみながら、茨など生ひしげりて、衣の袖をさへぎるにあへば、すかすかと切つて払ひて、うつくしき人を通し参らす。されば山路のなやみなく、高き塗下駄の見えがくれに長き裾さばきながら来たまひつ。

かくて大沼の岸に臨みたり。水は漫々として藍を湛へ、まばゆき日のかげも此処の森にはささで、水面をわたる風寒く、颯々として声あり。をぢはここに来てソとわれをおろしつ。はしり寄れば手を取りて立ちながら肩を抱きたまふ、衣の袖左右より長くわが肩にかかりぬ。

蘆間の小舟の纜を解きて、老夫はわれをかかへて乗せたり。一緒ならではと、しばしむづかりたれど、めまひのすればとて乗りたまはず、さらばとのたまふはしに棹を立てぬ。船は出でつ。わツと泣きて立上りしがよろめきてしりゐに倒れぬ。舟といふものにははじめて乗りたり。水を切るごとに眼くるめくや、背後にゐたまへりとおもふ人の大なる環にまはりて前途なる汀にゐたまひき。いかにして渡し越したまひつらむと思ふときハヤ左手なる汀に見えき。見る見る右手なる汀にまはりて、やがて旧のうしろに立ちたまひつ。箕の形したる大なる沼は、汀の蘆と、松の

木と、建札（たてふだ）と、その傍（かたわら）なるうつくしき人ともろともに緩（ゆる）き環（わ）を描いて廻転し、はじめは徐（おもむ）ろにまはりしが、あとあと急になり、疾（はや）くなりつ、くるくるくると次第にこまかくまはるまはる、わが顔と一尺ばかりへだたりたる、まぢかき処（ところ）に松の木にすがりて見えたまへる、とばかりありて眼の前（さき）にうつくしき顔の﨟（ろう）たけたるが莞爾（につこ）とあでやかに笑（え）みたまひしが、そののちは見えざりき。蘆は繁（しげ）く丈（たけ）よりも高き汀（みぎわ）に、船はとんとつきあたりぬ。

ふるさと

をぢはわれを扶(たす)けて船より出(い)だしつ。またその背(せな)を向けたり。

「泣くでねえ泣くでねえ。もうぢきに坊ツさまの家(うち)ぢや。」と慰めぬ。かなしさはそれにはあらねど、いふもかひなくてただ泣きたりしが、しだいに身のつかれを感じて、手も足も綿の如くうちかけらるるやう肩に負はれて、顔を垂れてぞともなはれし。見覚えある板塀(いたべい)のあたりに来て、日のややくれかかる時、老夫(おじ)はわれを抱(いだ)き下(おろ)して、溝のふちに立たせ、ほくほく打(うち)ゑみつゝ、慇懃(いんぎん)に会釈(えしやく)したり。

「おとなにしさつしやりませ。はい。」

といひずてに何地ゆくらむ。別れはそれにも惜しかりしが、あと追ふべき力もなくて見おくり果てつ。指す方もあらでありくともなく歩をうつすに、頭ふらふらと足の重たくて行悩む、前に行くも、後ろに帰るも皆見知越のものなれど、誰も取りあはむとはせで往きつ来りつす。さるにてもなほものありげにわが顔をみつつ行くが、冷かに嘲るが如く憎さげなるぞ腹立しき。おもしろからぬ町ぞとばかり、足はわれ知らず向直りて、とぼとぼとまた山ある方にあるき出しぬ。けたたましき跫音して鷲摑に襟を摑むものあり。

あなやと振返ればわが家の後見せる奈四郎といへる力逞ましき叔父の、凄まじき気色して、

「つままれめ、何処をほツつく。」と喚きざま、引立てたり。また庭に引出して水をやあびせられむかと、泣叫びてふりもぎるに、おさへたる手をゆるべず、

「しつかりしろ。やい。」

とめくるめくばかり背を拍ちて宙につるしながら、走りて家に帰りつ。立騒ぐ召つかひどもを叱りつつも細引を持て来さして、しかと両手をゆはへあへず奥まりたる三畳の暗き一室に引立てゆきてそのまま柱に縛めたり。近く寄れ、喰さきなむと思ふのみ、歯がみ

して睨（にら）まへたる、眼（め）の色こそ怪（あや）しくなりたれ、逆（さか）つりたる眦（まなじり）は憑（つ）きもののわざよとて、寄りたかりて口々にののしるぞ無念なりける。

おもての方（かた）さざめきて、何処（いずく）にか行（ゆ）きをれる姉上帰りましつと覚（おぼ）し、襖（ふすま）いくつかぱたぱたと音してハヤここに来たまひつ。叔父は室（しつ）の外にさへぎり迎へて、

「ま、やつと取返（とりかえ）したが、縄を解いてはならんぞ。もう眼が血走つてゐて、すきがあると駈け出すぢや。魔（エテ）どのがそれしよびくでの。」

と戒（いまし）めたり。いふことよくわが心を得たるよ、しかり、隙（ひま）だにあらむにはいかでかここにとどまるべき。

「あ。」とばかりにいらへて姉上はまろび入りて、ひしと取着(とりつ)きたまひぬ。ものはいはでさめざめとぞ泣きたまへる、おん情手(なさけて)にこもりて抱(いだ)かれたるわが胸絞(しぼ)らるるやうなりき。

姉上の膝に臥(ふ)したるあひだに、医師来(きた)りてわが脈をうかがひなどしつ。叔父は医師とともに彼方(あなた)に去りぬ。

「ちさや、どうぞ気をたしかにもつておくれ。もう姉様(ねえさん)はどうしようね。お前、私だよ。姉さんだよ。ね、わかるだらう、私だよ。」

といきつくづくぢつとわが顔をみまもりたまふ、涙痕(るいこん)したたるばかりなり。

その心の安んずるやう、強(し)ひて顔つくりてニツコと笑うて見せぬ。

「おお、薄気味(うすきみ)が悪いねえ。」

と傍(かたわら)にありたる奈四郎(なしろう)の妻なる人呟(つぶや)きて身ぶるひしき。

やがてまた人々われを取巻(とりま)きてありしことども責むるが如くに問ひぬ。くはしく語りて疑(うたがい)を解かむとおもふに、をさなき口の順序正しく語るを得むや、根問(ねど)ひ、葉問(はど)ひするに一々(いちいち)説明(ときあ)かさむに、しかもわれあまりに疲れたり。うつつ心に何をかいひたる。

やうやくいましめはゆるされたれど、なほ心の狂ひ

たるものとしてわれをあしらひぬ。いふこと信ぜられず、すること皆人の疑をいかにせむ。ひしと取籠めて庭にも出さで日を過しぬ。血色わるくなりて痩せもしつとて、姉上のきづかひたまひ、後見の叔父夫婦にはいとせめて秘しつつ、そとゆふぐれを忍びて、おもての景色見せたまひしに、門辺にありたる多くの児ども我が姿を見ると、一斉に、アレさらはれものの、気狂の、狐つきを見よやといふいふ、砂利、小砂利をつかみて投げつくるは不断親しかりし朋達なり。

姉上は袖もてわれを庇ひながら顔を赤うして遁げ入りたまひつ。人目なき処にわれを引据ゑつと見るま

に取って伏(ふ)せて、打ちたまひぬ。
悲しくなりて泣出(なきだ)せしに、あわただしく背(せな)をばさすりて、
「堪忍(かんにん)しておくれよ、よ、こんなかはいさうなものを。」
といひかけて、
「私(わたし)あもう気でも違ひたいよ。」としみじみと掻口説(かきくど)きたまひたり。いつのわれにはかはらじを、何とてさはあやまるや、世にただ一人なつかしき姉上までわが顔を見るごとに、気を確(たしか)に、心を鎮(しず)めよ、と涙ながらいはるるにぞ、さてはいかにしてか、心の狂ひしにはあらずやとわれとわが身を危(あや)ぶむやうそのたびになり

まさりて、果(はて)はまことにものくるはしくもなりもてゆくなる。
たとへば怪(あや)しき糸の十重二十重(とえはたえ)にわが身をまとふ心地(ここち)しつ。しだいしだいに暗きなかに奥深くおちいりてゆく思(おもい)あり。それをば刈払(かりはら)ひ、遁出(のがれい)でむとするにその術(すべ)なく、すること、なすこと、人見て必ず、眉(まゆ)を顰(ひそ)め、嘲(あざけ)り、笑ひ、卑(いや)しめ、罵(ののし)り、はた悲(かな)しみ憂(うれ)ひなどするにぞ、気あがり、心激(こころげき)し、ただじれにじれて、すべてのもの皆われをはらだたしむ。
口惜(くちお)しく腹立たしきまま身の周囲(まわり)はことごとく敵(かたき)ぞと思わるる。町も、家も、樹も、鳥籠(とりかご)も、はたそれ

何らのものぞ、姉とてまことの姉なりや、さきには一(ひと)たびわれを見てその弟を忘れしことあり。塵(ちり)一つとしてわが眼に入るは、すべてものの化(け)したるにて、恐しきあやしき神のわれを悩まさむとて現(げん)じたるものならむ。さればぞ姉がわが快復(かいふく)を祈る言(ことば)もわれに心を狂はすやう、わざとさはいふならむと、一(ひと)たびおもひては堪(た)ふべからず、力あらば恣(ほしいまま)にともかくもせばやせよかし、近づかば喰ひさきくれむ、蹴飛(けと)ばしやらむ、掻(かき)むしらむ、透(すき)あらばとびいでて、九(ここの)ツ谺(こだま)とをしへたる、たうときうつくしきかのひとの許(もと)に遁(に)げ去らむと、胸の湧(わ)きたつほどこそあれ、ふたたび暗室にいま

しめられぬ。

千呪陀羅尼

毒ありと疑へばものも食はず、薬もいかでか飲まむ、うつくしき顔したりとて、優しきことをいひたりとて、いつはりの姉にはわれことばもかけじ。眼にふれて見ゆるものとしいへば、たけりくるひ、罵り叫びてあれたりしが、つひには声も出でず、身も動かず、われ人をわきまへず心地死ぬべくなれりしを、うつらうつら舁きあげられて高き石壇をのぼり、大なる門を入りて、

赤土(あかつち)の色きれいに掃(は)きたる一条(ひとすじ)の道長き、右左、石燈籠(いしどうろう)と石榴(ざくろ)の樹の小さきと、おなじほどの距離にかはるがはる続きたるを行(ゆ)きて、香(こう)の薫(かおり)しみつきたる太き円柱(まるばしら)の際(きわ)に寺の本堂に据(す)ゑられつ、ト思ふ耳のはたに竹を破(わ)る響(ひびき)きこえて、僧ども五三人(ごさんにん)一斉に声を揃(そろ)へ、高らかに誦(じゅ)する声耳を聾(ろう)するばかり喧(かし)ましさ堪(た)ふべからず、禿顱(とくろ)ならびゐる木のはしの法師ばら、何をかすると、拳(こぶし)をあげて一人(にん)の天窓(あたま)をうたむとせしに、一幅(ひとはば)の青き光颯(さつ)と窓を射て、水晶の念珠瞳(ねんじゅひとみ)をかすめ、ハツシと胸をうちたるに、ひるみて踞(うずく)まる時、若僧円柱(じゃくそうえんちゅう)をいざり出(い)でつつ、ついゐて、サラサラと

金襴（きんらん）の帳（とばり）を絞（しぼ）る、燦爛（さんらん）たる御厨子（みずし）のなかに尊（とうと）き像（すがた）こそ拝まれたれ。一段高まる経の声、トタンにはたたがみ天地（てんち）に鳴りぬ。

端厳微妙（たんげんみみよう）のおんかほばせ、雲の袖（そで）、霞（かすみ）の袴（はかま）ちらちらと瓔珞（ようらく）をかけたまひたる、玉（たま）なす胸に繊手（せんしゅ）を添へて、ひたと、をさなごを抱（いだ）きたまへるが、仰（あお）ぐ仰ぐ瞳（ひとみ）うごきて、ほほゑみたまふと、見たる時、やさしき手のさき肩にかかりて、姉上は念じたまへり。

滝やこの堂にかかるかと、折しも雨の降りしきりつ。渦（うずま）いて寄する風の音、遠き方（かた）より呻（うな）り来て、どつと満山（まんざん）に打（うち）あたる。

本堂青光（あおびかり）して、はたたがみ堂の空をまろびゆくに、たまぎりつつ、今は姉上を頼までやは、あなやと膝（ひざ）にはひあがりて、ひしとその胸を抱（いだ）きたれば、かかるものをふりすてむとはしたまはで、あたたかき腕（かいな）はわが背（せな）にて組合（くみあ）はされたり。さるにや気も心もよわよわとなりもてゆく、ものを見る明（あきら）かに、耳の鳴るがやみて、恐しき吹降（ふきぶ）りのなかに陀羅尼（だらに）を呪（じゅ）する聖（ひじり）の声々（こえごえ）さわやかに聞きとられつ。あはれに心細くもの凄（すご）きに、身の置処（おきどころ）あらずなりぬ。からだひとつ消えよかしと両手を肩に縋（すが）りながら顔もてその胸を押しわけたれば、襟（えり）をば掻（か）きひらきたまひつつ、乳（ち）の下にわがつむり

押入れて、両袖を打かさねて深くわが背を蔽ひ給へり。御仏のそのをさなごを抱きたまへるもかくこそと嬉しきに、おちゐて、心地すがすがしく胸のうち安く平らになりぬ。やがてぞ呪もはてたる。雷の音も遠ざかる。わが背をしかと抱きたまへる姉上の腕もゆるみたれば、ソとその懐より顔をいだしてこはごはその顔をば見上げつ。うつくしさはそれにもかはらでなむ、いたくもやつれたまへりけり。雨風のなほはげしく外をうかがふことだにならざる、静まるを待てば夜もすがら暴通しつ。家に帰るべくもあらねば姉上は通夜したまひぬ。その一夜の風雨にて、くるま山の山中、俗

に九(ここの)ツ谺(こだま)といひたる谷、あけがたに杣(そま)のみいだしたるが、忽(たちま)ち淵(ふち)になりぬといふ。

里の者、町の人皆挙(みなこぞ)りて見にゆく。日を経(へ)てわれも姉上とともに来(きた)り見き。その日一天(いってん)うららかに空の色も水の色も青く澄(す)みて、軟風(なんぷう)おもむろに小波(ささなみ)わたる淵の上には、塵(ちり)一葉(ひとは)の浮べるあらで、白き鳥の翼(つばさ)広きがゆたかに藍碧(らんぺき)なる水面を横ぎりて舞へり。すさまじき暴風雨(あらし)なりしかな。この谷もと薬研(やげん)の如き形したりきとぞ。

幾株(いくかぶ)となき松柏(まつかしわ)の根こそぎになりて谷間に吹倒(ふきたお)されしに山腹の土(つち)落ちたまりて、底をながるる谷川をせ

きとめたる、おのづからなる堤防をなして、凄(すさ)まじき水を湛(たた)へつ。一(ひと)たびこのところ決潰(けつかい)せむか、城(じよう)の端(はな)の町は水底(みなそこ)の都となるべしと、人々の恐れまどひて、怠(おこた)らず土を装(も)り石を伏(ふ)せて堅き堤防を築きしが、あたかも今の関屋(せきや)少将の夫人姉上十七の時なれば、年つもりて、嫩(ふたば)なりし常磐木(ときわぎ)もハヤ丈(たけ)のびつ。草生(お)ひ、苔(こけ)むして、いにしへよりかかりけむと思ひ紛(まが)ふばかりなり。

あはれ礫(つぶて)を投ずる事なかれ、うつくしき人の夢や驚かさむと、血気なる友のいたづらを叱(しか)り留(とど)めつ。年若く面(おもて)清(きよ)き海軍の少尉候補生は、薄暮暗碧(はくぼあんぺき)を湛(たた)へた

る淵（ふち）に臨みて粛然（しゅくぜん）とせり。

底本：「鏡花短篇集」岩波文庫、岩波書店
１９８７（昭和62）年９月16日第１刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第三巻」岩波書店
１９４１（昭和16）年12月
初出：「文芸倶楽部」
１８９６（明治29）年11月
入力：砂場清隆
校正：松永正敏
２０００年８月30日公開
２００５年12月１日修正
青空文庫作成ファイル：